



日々奮闘し地域づくりに貢献 わが社の新入社員

3K職種の代表と言われた建設業は担い手確保が大きな課題となっている。労働時間や給与、社会保険の見直し、生産性向上など魅力ある業種に向けた取り組みが必要だ。こうした中、若手確保のさまざまな取り組みを行っている地域密着の建設企業と、今年入社した新入社員に取材。それぞれが思う地元企業を選んだ理由や今後の目標からプライベートまでを語ってもらった。





縁の下の力持ちを目指し邁進中、 頼られる存在になりたい



阿部重組 (青森市本町1-7-5)

かとうたいせい 加藤泰聖さん

青森市にある阿部重組は、2022年4月に創業110年を迎えた青森を代表する総合建設業者であり、官民間わず、大型施設の新築や改修などに取り組んでいる。

今年4月に同社に入社した加藤泰聖さんは、県立青森工業高等学校の情報技術情報技術科を経て、あおもりコンピュータ・カレッジで簿記やパソコンスキルを学んだ。在学中、同社の求人を見つけ、調べてみると、これまで学んできた学校施設を同社が建てたことを知り、親近感を覚えたという。そこから、青森に根付き、歴史のある同社で、自身が身に着けた知識を活かしたいという思いから就職した。

現在の仕事は、建設部門の請求書の入力や書類の整理整頓などをメインに学んでいるほか、同社が施工する現場の安全パトロールに同行しているという。パトロールでは、上司と現場の危険箇所などのチェックを行い、その際、上司から安全パトロールは事故等を未然防止する目的以外にも、現場の環境づくりを進める上でも不可欠なものだと教わったと話す。ひとつの作業にもさまざまな意味があり、より一層、役割の重要性を感じたとのこと。

加藤さんは、これまで建設業に関わる機会が少なく、漠然と怖いイメージがあったと話すが、入社をきっかけ

に、建設業の魅力を知り、また、先輩社員たちの優しさに触れ、自分の思い違いだったことがわかったと顔を綻ばせる。

たくさんの作業をこなす中で、学校では学ぶ機会がなかった法律や簿記の専門知識の膨大さに四苦八苦することもあるが「毎日学びながらですが、早く社員の皆さんに頼られるようになりたい」と力を込める。また、休日はMARVELやスパイダーマンなどの海外のアクション映画を自宅や映画館で楽しんでいるという。

今後は、日々の業務の習熟に励むほか、2級建設業経理士の資格取得を目指す話し、今まで学んできた簿記の知識を基に、目標に邁進すると語ってくれた。



外ヶ浜町蟹田地区の山林調査の時の様子



東野建設工業 (盛岡市加賀野 2-8-15)



会社のマスコット福社長のひがボンと妃書のしのびよんと一緒に

かんだしゅうか

神田秋華さん

まつおこうすけ

松尾康介さん

毎年、新卒採用を行っている東野建設工業。今年度の新入社員4人の中から営業部の神田秋華さん、建築部の松尾康介さんに話を聞いた。

「テレビで女性建築士の活躍を見たことがきっかけで建設業に興味を持った」と話す花巻市出身の神田さんは、岩手県立大学短期大学部生活科学科で設計やCADなどを幅広く学んだ。家族構成を設定し1カ月で住宅1棟を設計したことも。一般住宅に興味を持っていたが、授業で工場の建設を学び、就活時に情報収集するうちに徐々に公共・民間施設などにも興味を湧いたという。現在は営業部に所属し、公共事業の入札関連の書類作成を担当する。「総合評価など細かいことが多い。誤字脱字に注意し、上司にオッケーをもらった時にはほっとする」と初々しさがのぞく。

入社後、実感したのは女性社員の多さ。男社会のイメージだった建設業だが「女性が多いため将来も想像しやすい」。また社内では「孫のように可愛がってもらっています！」と笑顔を見せる。

盛岡市内にある工場増築の施工監理に携わる松尾さん。「進捗を目で見て、肌で感じながら学んでいる。形になっていく工程が楽しい」と話す。

仙台市の東北文化学園専門学校建築土木科出身で、施工管理や製図、構造計算などを学んだ。地元で働きたいとの強い希望とともに、盛岡市の実家が同社から近く、さらに母校の改修を同社が行っていたため、地域に根差した会社として「親しみやすい印象があった」。このような多くの縁が重なり入社した。

「職人さんなど現場にはちょっと怖い印象があった」

と話す松尾さん。しかし、働いてみると「気さくな方が多く、積極的に話しかけるように意識している」。将来は「建築の設計などさまざまな仕事に携わってみたい」と話す。

今年で創立90周年を迎える総合建設業の東野建設工業。キャリアプランに沿った教育や資格取得のサポートもあるため、神田さんは2級建設業経理、松尾さんは2級施工管理技士の取得に向け、日々、勉強に励んでいる。



書類作成などデスクワークが多い神田さん。現場でオーガークの位置と掘削深さを確認する松尾さん

女性も活躍できると実感、
地域に根差した企業で活躍を

わが社の
新入社員

秋田

優しい先輩に教えられ 日々成長 現場進捗に手応え



中田建設 (秋田市山王5-9-2)

さ さ き り ょ う た
佐々木遼太さん

秋田市の中田建設は、1946年の創業以来、建築・土木問わず豊富な実績を持つ総合建設業。生コン製造から福祉までグループ企業5社を抱え、連携しながら地域の発展に寄与している。

建築部新卒の佐々木遼太さんは、入社後2週間目から秋田市内のタグチ工業秋田工場新築工場の現場事務所に勤務。協力業者の新規入場時やKY活動に関する書類整理、先輩社員の測定の補助、工事写真の撮影などを行っている。佐々木さんを含め社員は4人。「厳しい仕事と思っていたけど、皆優しくて丁寧に仕事を教えてもらっていて、印象がガラッと変わりました」と話す。

教わったことはメモに残し、気になることはすぐ聞いており、質問しやすい雰囲気とのこと。協力業者には父親よりも年上の人も多く、「コミュニケーションの取り方がまだまだ」。先輩からは「絶対に優しく教えてくれるから、気になることはどんどん質問するように」とアドバイスされており、積極的に話しかけるよう心掛けている。

測量機のセッティングが少しずつ早くなり、作業の前の道具の準備は言われる前に動けるようになってきたと、日々成長を感じている。測量結果を基に協力業者が型枠を組み、コンクリートが打設されていく様子に、頑張った手応えを感じるとし「今は先輩に頼っているけど、自分で判断して、何でもできるような大人になりたい」と意気込む。

秋田工業高校の出身で、同じクラスの友人が隣接する建築現場に勤めており、就職活動の際も2人で相談し合った。高校生向けの現場見学会にも参加を重ねており、「理解が深まった」と振り返る。「工業高校卒なので建設系に進んだ友人が多く、就職前にはお互い励まし合いました。工業系以外の高校の友達からは、進路について『すごい、かっこいい』と言われました」。

元高校球児で、今は年上の社会人に交じって草野球でプレー。「最近はおウリングにもハマっています」と笑う。先輩や仲間と囲まれながら、社会人として確かな歩みを続けている。



光波測量機の操作も徐々に上達



市村工務店 (山形市久保田3-11-12)

たけだきょうすけ
武田京祐さん



会社の応接室に飾られた大先輩のガウディと並んで

「最高のものをつくる」施工現場での夢

数百年掛かるとされていたサグラダ・ファミリア建築工事（スペイン）のメインタワーが、2026年に完成すると発表され建築界で話題を呼んでいる。

その設計者ガウディの最期の言葉『最高のものをつくらう』を合言葉とする市村工務店(山形市)は創業130年の伝統を次代に伝えるべく人材育成も余念がない。今年度の新入社員、武田京祐さんにインタビューした。

山形市内で育った武田さんは、小学校時代に実家を改築した際に「工程通りのプロセスで順序良く建築物を造るってすごい」と感嘆した記憶から、高校で進路選択を迎えた時には建築を学ぼうと決意。県立産業技術短期大学の建築環境コースに進学した。

大学は必修科目も多く、カリキュラムが凝縮されている分だけ自ら勉強しなければならない環境だ。現場に携わるべく施工管理を中心に学んだ。卒業時には「過去問を大量に解きました」と振り返る猛勉強で2級施工管理技士の1次試験も突破した。「忙しい受験勉強の合間に、コロナ明け記念という名目で、研究室で同級生と焼肉パーティーをした」思い出を懐かしく振り返る。今春、歴史と伝統の重みを感じて入社した市村工務店では建物の施工管理を行う建築部に配属され、庁舎改築工事の現場では写真撮影を任された。

即戦力と意気込んで現場に臨んだものの、学生時代とは教えられる知識や考え方の質も量も桁違い。写真の撮り方一つとっても、これまで漫然と撮影していたが、発注者側が見やすい画角で撮影しなければならないと教え

られ、学生時代とは全く違う視点のため頭を使う。一方で「誰とでも話せるのが長所」と語るように、先輩や上司に積極的に質問し、学びにいそむ。

2級施工管理技士の実務経験3年を満たし、学生時代の同級生たちと2次試験に一発合格するのが当面の目標だ。武田さんは「これから現場監督者に必要なスキルを身につけ、職人さんへの的確な指示やアドバイスを行えるリーダー的存在に、そして山形を担う建築技術者になりたい」と語っていた。

長く愛される「最高のもの」づくりを目指して、今日も武田さんの学びは続く。



現場で配筋の状態を確認する武田さん



多くの人の助けになりたい、 現場を任せられる技術を磨く



丸か建設 (宮城県加美町赤塚37)

ちばひろと
千葉大翔さん

しぶやけいと
澁谷慶斗さん

宮城県加美町に拠点を置き、地域を支える丸か建設は、今年で創業100周年を迎えた老舗企業。今年度の新入社員の中から土木部所属の千葉大翔さんと澁谷慶斗さんに同社を選んだ理由や今後の目標を聞いた。

古川工業高校の土木科で学ぶ中で、土木の仕事に興味を持った千葉さん。「形のあるものなので、出来上りを実感できる」というやりがいから、建設業界に進む道を決め「多くの人の助けになりたい」と思いを話した。

小牛田農林高校の農業土木科を卒業した澁谷さんは、高校2年生でのインターンシップで丸か建設と出会い、古川バイパスでの現場に触れた。そこで「建設業で働くなら、地元を支える丸か建設に入ろう」と決心した。入社後は「休日に道路を見て、自分の会社が造ったものなんだ」と見方が変わったそう。

2人は現在、現場で測量などの手伝いやPCでCADや工程確認などといった研修を行っている。研修の中で、千葉さんは「出来上がる工程を経験し、自分で管理することにやりがいを感じる」と話し、澁谷さんは「苦手だった測量が、研修を通して少しずつ上達していくのがやりがい」と語った。

入社後の苦労した点では、千葉さんは「高校時代に行っ



ていた実習と比べて、本格的な地盤で測量するのが難しい」と苦笑い。澁谷さんは「新しく使用するCADの修得に苦労した」と話し「でも一番は生活習慣の変化に慣れるのが大変だった」と笑いながら話した。2人とも「周りの人が温かく、疑問に思ったことをすぐに教えてくれる」「優しい方が多い」と温厚な職場環境を実感したそう。中でも「上司が気さくに話しかけてくれるおかげで、現場での気分転換につながる。休憩中に趣味が合う先輩との会話や食事が楽しい」とお互いに笑みを浮かべた。

今後の目標について2人は「自分の現場を任せられるまで技術力を磨き、1級施工管理技士の資格取得を目指す」と共通の目標を掲げた。千葉さんは道路と河川および橋梁の維持管理に、澁谷さんは、多くの人が利用しているインフラという点から特に道路工事で携わりたいと話す。



野地組

(福島県二本松市油井赤坂山27)

理想の先輩に学び、
地元企業で奮闘



しのつかちひろ

篠塚智太さん

さとうあひ

佐藤亜衣さん

1953年創業の野地組は、本社を置く福島県二本松市を拠点に公共インフラ整備や建築工事のほか、輸入住宅の販売や不動産業なども手掛けており、地域に根ざした総合建設業者として幅広く事業を展開している。

同社では、学生向けの就職ガイダンスなどを通じ若手社員の確保に努めており、本年度は新卒社員合計4人を採用した。このうち、地元二本松市出身で将来の担い手として期待される工事部の篠塚智太さん、総務部の佐藤亜衣さんに取材した。

篠塚さんは県立二本松実業高等学校の都市システム科出身で、測量などの土木関連知識を学んできた。就職ガイダンスで常に見掛ける同社に対し、新卒採用への本気度を感じとったことから志望を決めたという。

入社前は、建設業界に対し怖い人が多く厳しいなどの印象を持っていたが、実際の雰囲気はフレンドリーで「作業員との昼休みの会話が日常の楽しみの一つとなっている」と笑顔を見せる。

現在は年齢が近い先輩社員に付き、背中を見ながら舗装補修現場の手伝いや役所への提出書類作成などを行っている。仕事の目標を聞くと、優良現場代理人として表彰を受けた先輩に憧れていると話し「尊敬する先輩のように一人で現場をまわせるようになり、会社の戦力になりたい」と熱い意気込みを語った。

佐藤さんは、福島学院大学短期大学部情報ビジネス学科の出身で、パソコンによるデータ入力など実務処理を学んできた。入社を決め手は、建設業界に従事する父か

ら「野地組はいい会社だよ」との言葉を受けたことがきっかけだ。

事務職には単調なイメージを持っていたが、事務用品の集計や各種書類作成などの担当実務を通じ、多くの人と関わるケースがある中で多様なコミュニケーションが求められることにギャップを感じたという。

初めて耳にする業界用語を先輩に教わりながら日々学んでいるそうでフレッシュさを感じるが、将来について「まだ慣れないことがたくさんあるが、上司のように何でもできるようにになりたい」と理想を掲げる姿が頼もしい。

